「つち」の「いえ」

むらたちひろ

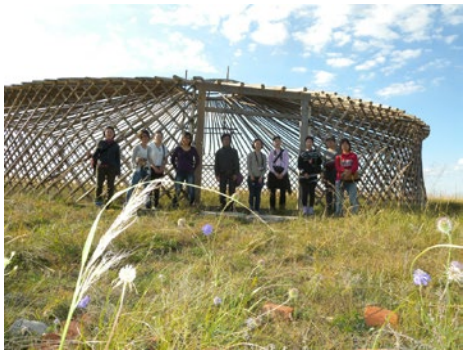
私が体験した「つちのいえ」は、草刈りや竹組み、土の採取など作業を積み上げて少しずつ形になっていく段階でした。土壁の解体・再生をはじめ様々な技や知恵を学び、自分たちの「つちのいえ」をつくる方法を探る過程は、「つち」とは何か・「いえ」とは何か、ということから探究した時間だったように思います。大袈裟なようですが、議論や研究というよりも、素朴な疑問や偶然できた形に対して、自然に向き合える場だったのだと思います。当時の私は、そんな体験を自身の制作に活かす余裕はありませんでしたが、大学を出て10年経とうとする今、興味関心の開き方として大きく影響を受けていると感じます。

そんな「つちのいえ」の体験は沓掛に収まらず、2012年には有志メンバーで内モンゴルに出かけたこともありました。この旅は、漆工に在籍していた内モンゴル出身のサンナさんの故郷を訪ねるもので、私は大学を出て働いていましたが、メーリングリストでふと旅の計画を目にし、思い立って参加しました。美味しい羊料理を堪能しつつ、雄大な大地と急速に開発が進む街を訪れながら、その土地に根付く文化や民族意識を色濃く感じ、その印象もまた私の中で漂い続けています。

今振り返ると、学生として過ごす期間はあっという間だと改めて思います。前期・後期・年度で区切られる授業が多いなか、「つちのいえ」のように長期的に取り組まれるプロジェクトに参加できたことは幸運でした。私が参加したのは初期段階でしたが、井上先生は初めから長期スパンで、終わりを決めずに取り組まれていたのではないかと思います。だからこそ、そこで遭遇する興味や問題意識が、長い時間軸で視野を広げ続けてくれるのだと思います。(706字)

2011年　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程 工芸/染織 修了。
主な展覧会：すべとしるべ2020 #01「時の容 / when it goes」('20年,オーエヤマ・アートサイト/ 京都)、京都府新鋭選抜展('19, '16年, 京都文化博物館)、個展「Internal works / 境界の渉り」('18年, Gallery PARC/ 京都)、藤原隆男 京都市立芸術大学退任記念展「ほしをみるひと」('18年, 京都市立芸術大学Gallery @KCUA / 京都)、「未来の途中の、途中の部分」('17年, 京都市立芸術大学Gallery @KCUA / 京都)

内モンゴル旅行(2012年9月)



むらたちひろ
《一滴の出来事 /when it drops》、《 今 / this moment 》展示風景(2017)
撮影：志儀駒貴(photo by Shigi Komaki)